

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	衣服から見る日本
Author(s)	シリンガル, レイハン
Citation	日本語・日本文化研修プログラム研修レポート集, 28期 : 1 - 19
Issue Date	2013-11-30
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00038702
Right	
Relation	



衣服から見る日本

シリィンガル・レイハン

1. はじめに

ファッションに関してはこれまで様々な分野で、様々な視点から研究されてきた。ファッションは社会的な現象であるため、ファッションを対象とした社会学の研究も極めて多い。さて、ファッションとは何か。まず「ファッション」とは何かから述べる。

石山彰編「日英仏独対照語付 服飾辞典」(ダヴィッド社)によると「服飾の新型流行」とある。国際ファッションエディターであるシンシア・デュルカニン (*Cynthia Durcanin*) は、「ファッションは心の様相、つまり精神、自己の延長を表すのだ。囁き、強い活力の悲鳴、またはさりげないウィンクやスマイルといった形で、ファッションは語ることがある。殆ど全てのファッションは、自己に対する快適、自尊心の自己スタイルへの転換についてである」と述べている。また、英国のトップファッションデザイナー、キャサリン・ハメット (*Katherine Hamnett*) によると、服は、我々皆が理解できる無言のコミュニケーションを創造する。

ということは、ファッションは言葉のようなもの、ファッションは何かを語るということだ。他の文化と密接な関係を持つファッションはつまりコミュニケーションなのだ。ある人の衣服からその人がどんなタイプの人か推測できるのではないだろうか。ファッションに全然興味がないと言う人でさえ、明日着る服についてまったく考えないはずはない。また、「ファッションは皮膚の延長」とか「衣服は第二の皮膚」などと言われることも多い。

人は古来より、その時代の生活を衣服に反映してきた。そして、時代を追うごとに知恵を働かせ、意匠を凝らし、様々な衣服を作り、その国、その地域の人々によって今日まで受け継がれている(小川:1979年)。と言っても、ファッションは様々な流行の服、衣料品だけを意味するものではない。その時代に生きている人々の心を呼吸し、文化と深く関わりながら「形」として生み出されるものである。そのため、江戸300年を経て今日にまで至る日本のファッションの歴史を検討し、その変化を研究すれば、日本社会の心にあるもの、歴史を貫くライフスタイルなども分かるのではないだろうか。文化の一領域として興味を惹き付けるものであるファッションを研究すれば、日本の美意識と言えるようなものも見えてくるだろう。

本研究では、時代を生きる人々の意識、心を反映するものであり、世界でも例を見ないファッション文化である日本の装束の前史を含め、千四百年前の衣服の歴史から、江戸300年を経て今日にまで至る日本のファッションの歴史を見て行こうと思う。日本の伝統的なライフスタイルをよく理解した上で現代のライフスタイルを明らかにしていく。そうすることで、日本のファッションに語らせてみたい。

2. 歴史の中の衣服

2.1 江戸時代前史

まず、ここでは歴史的に見てみよう。飛鳥時代（6世紀末～8世紀初め）にはハッキリした証拠はないものの、埴輪（天皇の墓に備える人形）の着ている服から飛鳥時代の装束は推量できる。日本は百済（朝鮮半島南部にあった）から高度の裁縫技術を学び、百済の衣服を模倣したということが歴史書に記載されている。飛鳥時代に特徴的なのは衣服の前の打ち合わせが左前であることである。この特徴は古代から連綿と受け継がれている。

『養老令／養老律令（ようろうれい／ようろうりつりょう）』（718年）という基本法令によれば、当時の衣服は三種類（礼服・朝服・制服）と定められている。礼服は大きな儀式の時しか着られない唐（大陸の古代国家）の式の服だが、高価なものだったため、世代間で受け継がれた。朝服は勤務を行う時の服であり、冠は同じだが、生地は異なる。仕事の内容によって形や着方が少し異なる。朝服の場合は西アジアの様式が見られる。制服は朝廷に行く時、庶民が着ていた朝服に似た服である。黄色だが、この無位=黄色という色彩は原則として明治まで千二百年間、国の法律として効力を持っていた。飛鳥時代が終わる頃、719年に、衣服の前の打ち合わせが右前になった。また、手に尺を持つきまりができた。どちらも唐（大陸の古代国家）の様式である。

平安時代（794年～）は雅な時代であり、唐の様式の模倣に止まらず、装束、衣服の文化は独自の発展を遂げることになった。平安時代の初期（九世紀）は大陸の影響がピークに達し、唐風の礼服は正月や儀式に着なくなり、それに代わって、西アジア風の朝服が用いられるようになった。儀礼用の服にも優美さが求められたのだ。大陸の影響が弱まったことにより、国風文化が生まれ、住環境と共に、服装も動きやすいものに変った。こうして、唐風の朝服が日本式に変容したものが「束帯（そくたい）」になる。平安時代中期には曲線が美しく、ゆったりとしたものが好まれ、服は幅が広がった。これで今日の装束に一步近づいたと言える。しかし、大陸の影響が残っていないわけではない。平安時代の日本の衣服ならではの特徴としては、グラデーションなどで色が重視された。これによってただゴージャスにするだけでなく、上品さや雅やかさも尊重した。平安時代後期には政治体制が新しくなり、あらゆることが自由になり、装束にも新しいセンスやアイディ

アが見られるようになった。また、貴族の時代から徐々に武士の時代に移行していくものの、彼らがファッション界をリードするのはもう少し後の時代になる。

鎌倉時代には、衣服はゴージャスであることが重視されるようになった。女性用の袴の衰退にともない、肌着である小袖が袴の代わりになってきた。そのため、色や袖口などが変化してきた。また、衰退を恐れた貴族が装束について書いたものが増えてきた。

室町時代、戦国時代には戦争が多かったため、装束文化の発展はほとんど見られなかった。しかし、安土桃山時代になると、伝統的な装束とは似て非なるものが出てきた。また、この時代は、人の目を引く豪華で派手なパフォーマンスを大切に新しい芸術家が現れた。彼らによって日本の装束は華やかになったといっても過言ではない。

江戸時代、平和な治世が続くと、伝統的な装束が再び注目されるようになってきた。公式と認められた服は束帯であり、重要な儀式の際には着られていたが、普段は階級に応じた服が着られていた。装束は非常に高価であったため、衰退した貴族は満足に装束を揃えることができなかった。そこで、都にあった「レンタルショップ」ですべてを借りていたようである。

明治時代には、文明開化の流れの中で、伝統的な装束をよしとする考えはなくなっていく、服には欧米の影響が見られるようになった。つまり「洋服」である。洋服が日本に入ってきたため、公式の場で着る服装について議論された。洋服に対してポジティブな意見もあったが、ネガティブな意見もあった。

「私（天皇）が思うに、風欲というものは時代の流れに変化するものだが、国の基本原理はどんな時代も不変である。今の衣冠（いかん：装束）の制度は、奈良時代に唐の制度を真似したものから始まり、時の流れとともに軽弱なものとなった。私はこれを非常に嘆かわしいと思う。日本は武士を持って治めてきた古き伝統がある。天皇みずから軍の先頭に立ち、国民はその精神を仰いできた。神武天皇の建国、神功皇后の征韓などの時の服装は決して今日の装束ではない。どうして一日たりとも軽弱な姿を天下に示せようか。私は今、断然その服制を改め、その風欲を一新して、建国以来の武を尊ぶ国の基本原理を打ち立てたいと思う。お前たち近臣は、私の気持ちを理解しなさい。

天皇の公式発表の後から公式の場における男性の服装は洋服になった。一方、女性は第二次世界大戦後まで「桂袴（けいこ）」という伝統的な服装が用いられた。しかし、伝統的な装束は完全になくなったわけではなく、今日でも様々な行事（神社で行われる祭りなど）で使用されている。



桂袴

2.2 江戸の着物と生活における衣服

ここでは江戸時代の着物と衣服についてみておく。

遊女と歌舞伎者

歴史的にみると、江戸時代のファッションの流行の最先端を行っていたのは、遊女（ゆうじょ）とかぶき者（もの）、そして歌舞伎役者であった。丸山伸彦『江戸のきものと衣生活』（2007年）によると、遊女やかぶき者は、社会階層の枠外（わくがいに）あって、虚構の世界に生きる稀有（けう）な存在であり、彼らは伝統的規範や慣習にとらわれない大胆な衣装を愛好したようだ。

遊女たちは自らの存在を強く主張するために、着る物に精力を注いだ。その結果、人の目を引く華やかな意匠が工夫され、大型の文様や新奇なモチーフが好んで採用されたことで変化の歴史を見せている。

かぶき者の自己主張の強い装いは、特に若者達の羨望的となり、遊女の場合と同様、流行に大きな影響を与えた。

江戸時代には、現代のファッションの流行の原点が見られると日本服装史には書かれている。

歌舞伎の影響

丸山伸彦(2007年)は菊五郎(きくごろう)や団十郎(だんじゅうろう)の「かまわぬ」模様など、特に元禄時代から発生した流行が多いと述べている。「鎌の絵、輪、ひらがなの『ぬ』」を組み合わせる「構わぬ(=気にしない)」を表す「かまわぬ」模様は、江戸っ子の心意気を示すものとして、江戸前期に町奴の衣装の模様として好まれたものだった。それを七代目市川団十郎が魚屋団七(さかなやだんしち)の浴衣に使ったところ、話題となり、江戸の町で大流行した。【歌川豊国(うたがわとよくに)『曾我祭倅七代目市川団十郎の魚屋団七』、文化10年1813年】



鳥文斎栄之『桜下美人図』

市井の人々が歌舞伎の風俗に大きな関心を寄せ、それを貪欲に取り入れたのは、それが変化に富み、刺激的だったからであり、そういった流行への敏感さが、歌舞伎に精通し、流行の最先端を知っていることを示す証となったからである。人々は堅実ではあっても、

単調で凡庸な生活に飽きてしまい、人目を引く魅力的な装いを渴望していたようで、このように流行に敏感であることを重視したのだ。（丸山：2007年）

「江戸時代の流行を前時代と分かつ大きな変化は、出版という情報伝達経路の出現である」とも丸山は書いている。

小袖（こそで）

「特記すべきは、近世において男女の主となる表着の形式が小袖に統一された点である。いうまでもなく性差の表示は、衣服の持つ重要な役割の一つである。中世には、公的な場における男女の区別は、衣服の形式差によってなされていた。」（丸山：2007年）

それでは、一体小袖とは何か。小袖とはどのような特徴を持つものだろうか。男女の衣服にはどんな変化が生じたのか見て見よう。

現代のキモノは、江戸時代まで「小袖」と呼ばれていた。「小袖」とは言うが、袖丈（そでたけ）の長い大振袖（おおふりそで）も、浴衣や帷子（かたびら）も広義には小袖だと呼ばれている。「大袖に対する言葉で、一般には広口の袖の表着（おもてぎ）の下に用いた内着をさすが、広義には、中国から入ってきた襟のつまった服装に対し、襟をかき合わせる固有の服装はすべて小袖系ということが出来る。狭義（きょうぎ）には、のちに表着となり、袴を取り去って着流しとなり、〈きもの〉に発展した内着の一種をいう。」（世界大百科事典 第2版の解説）

はじめは、服装全体を構成する服の一つの名であったが、衣服の袖が慣用上、大袖、広袖であるのが普通になると、小袖はその下に着られる内衣（ないい）と考えられるようになり、袴を着る形式である束帯の衣服の構成においても、上に着る広袖の表衣（ひょうい）に対してその下に着られる筒袖の衣を小袖と呼ぶようになったと北村哲郎著『日本服飾史』にある。

この装束の下に小袖が用いられるようになったのは「玉蕊（たまずい）」の承久2年（1220年）11月5日の条に「旧例男女共小袖を着ず、袴を用ふ、而して一条院初小袖を着す、それより以来上下これを用う」とあるように、12世紀末13世紀はじめのころからだったようだ。もっとも当初の小袖は絵画資料によると、手先を細く筒袖形態のもので、肌着的な性質を持っていたようである。しかし、その後従来内穿的な衣であった裵（あこめ）や単（ひとえ）が、装束一具（いちぐ）を構成する要素になるのに伴って、小袖が単に新たな内衣として発達したようだ。そして、袂（たもと）のある袖口の小さな形態のものとなり、鎌倉時代以後はもっぱらそうした形のものが小袖の定形となり、男女とも単のしたに必ず着用することとなったのである。（北村哲郎著『日本服飾史』）

小袖の形

今日の「キモノ」と江戸時代後期の小袖は、ほとんど同型だと指摘されている。それに対し、近世初期の小袖は形態が今日とは相当違っていた。丸山（2007年）は次のように述べている。

「まず、身幅（みはば）と衿（おくみ）がぐっと広く、対して袖幅は狭く、結果的に衿（ゆき）はかなり短かった。立褙（たてづま）も短く、襟先（えりさき）位置はかなり低かった。さらに、女性も対丈（ついたけ：身の丈と同じに布地を裁って衣服を作る）であった。」

狩野長信筆『花下遊楽図屏風』（かかゆうらくずびょうぶ）（東鏡秘伝書）は礼儀作法や服装・化粧など女性たちの一般教養について説いた啓蒙書であるが、ここには「小袖を仕立てるときには十分に注意しなければならない。身幅が広いと見栄えが悪いので少し小さめに仕立てることが大事である。・・・（中略）身丈は長いほうがよく、短いと下品に見える」とあり、細身で、裾が長く、優美に見える装（よそお）いが時代の主流をなすつあったことが知られる。

これらの解説をまとめて見ると、近世初期のキモノは、現在のキモノと形がかなり違っていたことがわかる。袖幅は狭く、裾まわりに余裕があると指摘されている。このような形の変化は一七世紀の半ばに生じた。装いにおける美の基準が変わっていったことがよく分かる。

江戸時代の人の様子

江戸時代 300 年は鎖国政策をとっていたので、それまで常に外国の影響を強く受けてきた日本人にとって、独自の文化を築く時代となったことは言うまでもない。しかも、それまで支配階級であった貴族や武家から、被支配階級の町人に、文化の担い手が移ったので、そこに生み出された風俗は、今までとは全く別のものであった。元々大陸文化を模倣してできた装束・衣服が、その後も格式や儀礼にこだわって、日本の風土に密着していなかったのに対し、文化が町人に帰着した江戸時代では、独特な風俗が生まれたと歴史書に書かれている。

江戸前期の随筆や井原西鶴の小説などに、裕福な町人達が、分を過ぎた華美を好み、高級な絹織物を用い、高価で珍しい染色の衣服を着ていたと書かれている。上で述べたように、これは小袖のことである。小袖が町人文化の生活を通して、日本人の服装となるに至った理由は、小袖の形式が座業を中心とする町人の生活に合っていたからであった。町人は、その職業柄、仕事着と生活着を区別する必要がなかった。この、衣服の両面の機能を果たしたことがあらゆる面で小袖の発展をもたらした。元来、平服だった小袖が礼服に

も利用されるようになり、町人生活の一切を満たしうる衣服となって、さらには、日本全体で標準の服装となっていくのである。それでは、小袖の変遷はどうだったか見てみよう。

小袖の変遷

小袖が全身をおおう表着として通用するようになったのは室町後期にさかのぼる。初期の小袖は、現在の着物に比べて身幅が広く、男女ほぼ同じ形で対丈（ついたけ：くるぶしまでの長さ）、これに締める帯も男女共に幅の狭いものであったと書かれている。

江戸時代に入ると、小袖の形や着方に男女の区別が生じ、女性用は次第に袖丈や身丈が長くなった。裾をひく丈長（たけなが）の小袖は、外出時には抱え帯でたくしあげて着るようになり、これが後に「おはしより」となる。また、若い娘の着る振袖の丈がしだいに長くなり、貞享（ていきょう：1684年～1688年）頃に2尺（約76cm）、宝暦（ほうれき：1751年～1764年）頃には2尺8、9寸（約106～110cm）の大振袖も現れて華やかさを増やしたようだ。結婚後は、「袖留め」「脇ふさぎ」などといって袖丈を短くし、振りのない袖とした。現在の女物の着物の袖には振りがあるが、未婚女性の振袖にたいして既婚者の式服を留袖というのは、この名残のようである。

帯も幅広くなって装飾的に結ぶようになったと見られる。延宝（えんぼう：1673年～1681年）頃には、人気の歌舞伎役者上村吉弥の舞台姿から出た吉弥結びの流行によって、長さは一丈2尺（約4、5メートル）、幅が5、6寸（約19～23cm）の帯を用いる女性も出てきたと伝えられている。

女性の小袖に比べると、男性は袴があったため、小袖はあまり大きな変化はなかったようである。現在まで対丈のままだ。帯も幅が、2丈（7.5cm）内外のものが続き、これが



現在の角帯にあたと述べられている。江戸時代を通じて、男性の小袖には黒、茶、紺などの無地や小紋や縞が用いられたのに比べて、女性の小袖には構図、主題共に多様な表現が試みられたようである。

江戸風の趣味の中心をなすのは渋い色合いの縞や小紋、そして黒への好みである。これらの衣服は前期には男性にのみ用いられるもので、一般には女性が好んで身に付けることはなかったが、十八世紀後半には「いき」な好みとして女性の服飾にも流行するようになる。「いき」という言葉は江戸前期から遊里を中心とする世界で用いられていた言葉で、当初は心意気（こころいき）、あるいは意気地（いきじ・いくじ）、すなわち大気（たいき）さを表していた。明和（めいわ：1764年～72年）頃から髪型や衣服を含めた具体的な事物の様態をさす言葉として流行し、やがて江戸町人文化の成熟を背景に一つの美意識として結実していく（中野：1984年）。

江戸初期には金銀の摺箔（すりはく）、絞り、刺繍を主とする全面布地の文様が多かったが、17世紀なかばから全身を眺め斜めに弧の形に区切る構図に、刺繍や絞りで和歌、漢詩、物語など古典文学や謡曲、伝説、行事などに取材した文様をつけることが流行した。文様のなかに大きな文字を配したものも多い。この種のことを寛文（かんもん）模様と呼ぶのは、寛文7年（1667年）に刊行された小袖雛形『新撰御ひいなかた』に、その特徴をもった図案が出ていることによる。小袖雛形は、これ以後江戸後期まで数多く出版されたので、流行文様を知るためのいい手掛かりとなっている。また、多彩で繊細な文様を自由に染めることが可能となったと指摘されている。この技法は画期的なものであったため、以後現在まで日本の文様染めの代表として続いている。

中期以後の女性の小袖は一層丈が長くなり、帯が幅広くなったこともあって、模様が小さくなり、帯をはさんで上下にわけて配置したものや、腰から下につける裾模様が好まれるようになった。裾模様の裾を曳いて着る場合に効果的であった。後期になっても格式の高い晴れ着などに用いられたと述べている。

江戸時代の髪型

江戸時代、小袖以外に目立つのはやはり髪型である。着物の形能やデザインの発展に呼応するように、江戸時代には数多くの髪型が生まれた。

男性の髪型

男性の髪型といえば、丁髷（ちょんまげ）だが、時代により結い方がずいぶん異なることに驚かされる。面白いことに、江戸時代の女性達が結った髪型の多くは、男髷（おとこまげ）の模倣から生まれたものが多いと見られる。男性の髪型には女心を捉える魅力があったのだろう。

近世の男性の結髪（ゆいがみ）は、室町末期以降広がった露頂（ろちょう）の風習が定着したことから、多様な発展を見せたと述べられている。織豊期から江戸初期にかけては、成人が月代（さかやき）を剃る武家の風習が一般庶民にも広がり、束ねた髪を元結（もとゆい）で巻いて先端を戻のように出した茶笥髷（ちゃせんまげ）と元結の先を二つ折にした髷とがみられた。元服前の男子は前髪を残して中剃りを行う若衆髷（わかしゅまげ）で、元服後に前髪を落とした。

江戸時代には二つ折の髷が武家、一般庶民ともに主流となり、髪型は月代（さかやき）



三代歌川豊国『白木屋お駒』/1853 1

の大きさ、髷の太さや形、鬢（びん：顔の左右の側面の髪）の厚さ、髷（たぼ：後頭部の髪）の形などの違いによって多様化したようである。髪型の変化は流行によるところも少なくないが、それ以前に身分、年齢、職業、人柄などによって細かく異なる。また、特徴的な流行として、月代を大きく剃り細かい髷の元結部分を高く結びあげた形である「本多髷（ほんだまげ）」が知られる。（増田美子：2010年を参照）

女性の髪型

江戸時代の女性達の髪型は年齢や身分、階級、地域、さらには未婚、既婚を表すもので、一目見ればこの誰だということがわかったと述べられている。また、時代によって、髪型を構成している髷、髷、鬢など部位が主流の流行もあった。

丸山（2007年）によれば江戸時代前期は、江戸時代を通して髷の基本となる四つの形「島田髷（しまだまげ）、兵庫髷（ひょうごまげ）、勝山髷（かつやままげ）、笄髷（とうがいまげ）」が登場した。中期になると髷の種類も増え、髷（とぼ）の先が反り返った形の鶴鴿髷（せきれいたぼ）が流行したと指摘されている。江戸時代後期には、透けた形の鬢が好まれたのか灯籠髷（とうろうびん）が人気を博し、江戸末期には、ふたたび髷が流行したそうである。

江戸時代の髪型で基本となった四つのうち、笄髷以外は遊女などが結い始め、その後一般庶民の女性達に広まっていったことから遊女の与えた影響がわかるだろう。

日本の歴史を物語る「きもの」

日本の着物は、六枚の布で構成されている【共衿（ともえり）は衿の一部】。年齢による大小の違いはあるが、老若男女同型で、この布を左右対称に縫い合わせると一枚のきものができる。

左を前（右おくみ）に打ち合わせ、紐（ひも）や帯を結ぶ着装方法の原則も同じである。下着および上着もほぼ同形に近く、重ね着ができるので、四季寒暖のある日本に適しているのは言うまでもない。

「雪まじりの雨の日あまり寒いので麻衾引きかぶり布肩衣をありたけ着たけれど」と上古、山上億良（天平五年、733年没）は貧窮問答で歌う。【布肩衣（ぬのかたぎぬ）は小袖以前の背縫いをし、肩からかけ、胴体を覆い前を打ち合わせるだけの二枚の布】

小袖から「きもの」と呼び名は変わっても、明治の改良運動にも変化を見せず、「重ね」などは簡略化されたが、大正、昭和へと続いた。二十一世紀まで愛用されてきたきものは、小袖を原型として一千年あまりの年月を経て平成の現在に受け継がれている。きもの歴史は型の変化ばかりではなく、各時代に工夫され発展して用いられ、今日に至っている。山下悦子が述べているように、布と人間の和にあるこのきもの融通無碍（ゆうづうむげ）は日本人の精神性に多大な影響を与えたと言っても過言ではない。さて、現在きものはどのような場で着用されているのか見てみよう。

生まれた子の健康と長寿を祈願し、地元の神社に参詣する古くからの日本の行事である「お宮参り」の時、子供には祝着（いわいぎ）を羽織らせる。【祝着は男児は五つ紋、女兒は華やかな友禅染、共に一つ身の仕立て】また、女兒の無事の成長を願い祝う三月三日の「雛祭り（ひなまつり）」で雛壇に飾られた様々な人形の服装も注目される。五月五日の「端午の節句（たんごのせっく）」の祭りには、男児は魔除けや招福を意味する文様の晴れ着を着用したようである。この習慣は現代にも伝わっている。海外でもよく知られている「お花見」の時も女性、子供は華やかに着飾り、よく着物を着用している。

「子は七歳まで神様からの預かりもの」という考え方が起源となってお祝いされている「七五三」の祭りがあるが、三歳になると、男児も女兒も髪を伸ばし始める。五歳で男児は袴を初めて着るのに対し、七歳で女兒は子供着の付け紐から帯を結び始める。

年が明けると、新調した着物に袖を通して新年を祝う「着衣始（きそはじめ）」という江戸時代より伝えられてきた習慣がある。人々が晴々と新しい着物を着てお正月を楽しむ

のだから、大切な祭りと言える。結婚式では「嫁ぎ先の色に染まる」という意味を含め、白無垢（日本の神前の挙式に着る花嫁の衣裳）の伝統が守り継がれている。伊藤佐智子『きもの』（2011年）は打掛（うちかけ）、着物、帯、足袋（たび）に併せて破る角隠し（つのかくし）や綿帽子（わたぼうし）も白で統一されているが、打掛の裏にだけ「紅絹（もみ）」で赤を配し、吉事の意味を表すと述べている。また、式後の宴には、お色直しとして、白無垢から華麗な吉祥文様の大振袖に着替えるとされている。

初期の宗教性はかたちを変え、現在では日本を代表する集団的祭典へと発展し、徳島のみならず各地で連を組んだ阿波踊り（あわおどり）という盆踊りの祭りの時の女性は、派手な裾よけに黒襦子の帯、掛け衿、白足装に下駄、男性は、はっぴに鉢巻（はちまき：日本において主に精神の統一や気合の向上のために用いられる、頭に付ける細長い布あるいは紐のこと）、巾着（きんちやく：日本古来の小物や手回り品を収納して持ち歩くための袋）に団扇（うちわ：手で扇いで風を起こす道具の一種）などが着用されると記されている。

「阿波踊り」「郡上踊り（ぐじょうおどり）」と合わせて日本三大盆踊りといわれる秋田の「西馬音内盆踊り（にしもないぼんおどり）」という祭りは「端縫衣裳（はぬいしよ：図表1に示す）」と呼ばれる衣裳が着用されると伊藤佐智子（2011年）が述べている。日本列島の各地で様々な祭典が行われ、多くの人が浴衣や着物を着ていると記されて

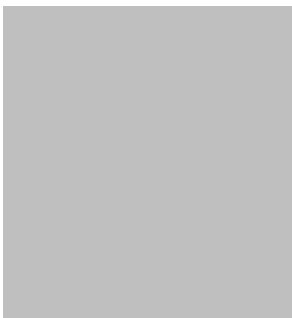


図1 端縫衣裳

いる。日本の古式魚法である「鵜飼（うかい）」の時、鵜匠（うしょう）は麻布（あさぶ）や、先端が風に吹かれ折れているように見える為、「風折烏帽子（かざおりえぼし）」と呼ばれる帽子で頭を覆い、篝火から頭を守ることが知られている。また、漁服（りょうふく）は木綿で、ほとんどが暗い色の木綿を用いているようである。仏教の宗教的な修行形態の一つである「托鉢（たくはつ）」もそうだが、僧侶が着用する衣服（総称して法衣）、特に肩にかける袈裟は神秘的であると伊藤佐智子(2011年)は述べている。

唄や踊り、三味線などの芸で宴席に興（きょう）を添えることを仕事とする女性と言われる舞妓・芸妓には季節、年齢に合わせた多くのしきたりがあり、芸の成長と共に、衣裳などの装身具、結髪（ゆいがみ）も大きく変化するようである。舞妓が着る肩上げと袖あげされた振袖は、「おひきずり」と呼ばれる裾の長さが特徴で、冬場は裾に綿を入れる。

「おこぼ（こっぼり）」と呼ばれる下駄を履き、裾を引き寄せ街を歩く舞妓は今でも広く海外から来る旅行者からも注目を集めているようである。世界中に知られている日本の競技である相撲（すもう）はと言うと、相撲競技の審判役、行司（ぎょうじ）の束帯に

は原則があり、烏幅子と直垂（ひたたれ）を着装して軍配（ぐんばい）を手に審判を示すと伊藤（2011年）は述べている。

前に述べたように、江戸時代のはじめに誕生し、上方庶民の娯楽として発展した日本の伝統芸能の「歌舞伎」が大きく影響していることは否定できないだろう。現在も江戸時代の服飾文化を基に役どころを構築し、演目ごとに「引き抜き（舞台上で瞬間的に衣裳を替える演出）」や、「ぶっ返り（一瞬にして衣裳を替える「引き抜き」の一種）」などの創意と工夫が施され、観劇の大きな楽しみと見られるのだが、やはり歌舞伎は日本人にとって日本文化のうちに無くてはならないものなのだろう。「歌舞伎の観劇には柔らかいきものをあつらえて行くもの」だと昔から言われている。そのため、お客を迎える立場の人も歌舞伎座には染めのきものを着ていくようにしているようだ。

狂言の束帯というと、肩衣（かたぎぬ）素襖（すおう：男性用の着物の一種。また素襖は素袍と表記されることもある）、長袴、半袴などのうち、富裕な大名や分限者は、大柄で華やかな素襖に長袴を着け、小紋の素襖に半袴の組み合わせは庶民を表していると記されている。

江戸時代を経て今日に続く能の装束には、織物技術の粋を凝らした芸術性の高い作品が数多く残されているようで、厳格な決まりごとを守り、何種類かの装束の組み合わせで着付けられていると記されている。

奈良時代に創られた日本最古の歌舞の総称である「雅楽（ががく）」に用いられる装束は宮廷の衣裳を基に作られ、伝統的な神道の服とマスクが着用されているそうである。

映画と着物

映画で使われる着物はやはり日常着る着物とは少し異なる。選ぶきものによる性格



Lady Snowblood: Queen of Kimono (and Death)

描写、着付けによる状況描写、そして場合によっては誇張した文様や紋などは、映像にメリハリがつくように大きめにすることがあるようだ。

「眼で見るとはなく、カメラの眼で観ること、映画美術の中での真実を追求することで、衣裳の調和がとれ、それが映画における醍醐味です」と伊藤佐智子(2011年)が述べているが、同感である。そういえば、日本美術のジャポニスムは十九世紀後半、その構図、色彩などでヨーロッパの伝統的な芸術表現に大きな影響を及ぼしている。

リサイクルの手本となるきもの

日本の伝統的な衣装である着物は高価であったため母から娘へ、娘から孫へ代々受け継がれて着られると先に述べた。絹を素材とした美しく高価な晴れ着は、古着になっても価値があるものとして大切に着続けることができるのは日本の衣装のもう一つのいい点ではないだろうか。高価な晴れ着だけではなく、木綿の着物などを含めたいわゆる「和服」には無駄がなく、また末永く使い続けるためのデザイン思想が貫かれている。着物という衣服は現代のリサイクルの手本とできるものだろう。

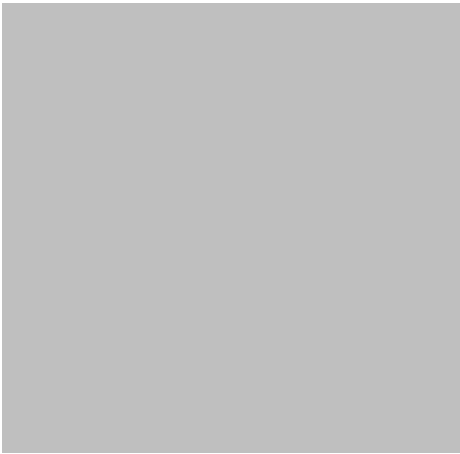
きものの構造には驚くべき発見が生かされているに違いない。まず反物から着物を作る際、ほとんど直線で断裁されるため、途中で無駄な布を出すことがなく、仮に残ってしまったとしても、長方形なので別のものに利用しやすいという特徴がある。例えば、着物地を使った巾着（きんちやく：軽さ・コンパクトさなどから、昔は生活の必需品であった）が挙げられる。また、扇子に着物地をあしらえば、独特の風合いの扇子が出来上がる。

きものは、いずれほどいて仕立て直すことを前提として作られている。そのため、切れやすい糸で縫われ、ほどいた時に布を傷めることが無いよう考慮されているそうである。ただし、仕立て直す場合も、着物はほどけばほとんど長方形の布になるため、継ぎ足したり省いたりといったことが容易に行える構造となっている。日本人の「もったいない」という思いや物を大切にする知恵が、着物には込められているようだ。

3. 日本の現代のファッション

日本人と洋服

日本における洋装化は江戸時代には既に始まっていた。1866年、江戸幕府によって陸・海軍の制服が洋装で制定されたことがきっかけとされる。鎖国が終わる江戸時代末期には外国人の姿が多く見られた。外国人が洋装している姿、当時の洋装を描いた



浮世絵や写真も多く残されている。つまり、軍隊や警察の制服は洋服であったが、一般社会には浸透していなかった。普通の人々はまだ着物を着ていた。特に女性は、着物が多かったようだ。

その後、洋服を着る女性は少しずつ増えていったが、昭和の始めに行われた調査の結果でも、洋服を着ている女性は、二割ぐらいしかいなかったと報告されている。ほとんどの人が洋服を着るようになったのは、

戦後になってからであると日本服飾史に記されている。第二次世界大戦後、日本人の生活が大きく変化したことは歴史の流れの中でよく言われるが、洋服を着るようになったこともやはりその一つの例だろう。尾形恵は次のように述べている。

「特に女性は鹿鳴館スタイルという新しいバスル・スタイルを生み出した。ドレスは海外からの輸入に頼るだけでなく、洋裁技術を日本人が習得し、和服地を利用してドレスを作り、着用する姿が浮世絵の調査から分かった。」【バスル：ロングスカートの腰当て】

尾形恵は浮世絵が生活実態を知る資料であり、明治時代の作品には洋装姿の日本人の姿が多く残されていると述べている。そこに描かれている鹿鳴館スタイルの日本人女性のドレスには植物や幾何学文様などが多く描かれており、植物には梅や牡丹といった日本人に馴染みの深い花も図案化して描かれているようだ。

現代へ

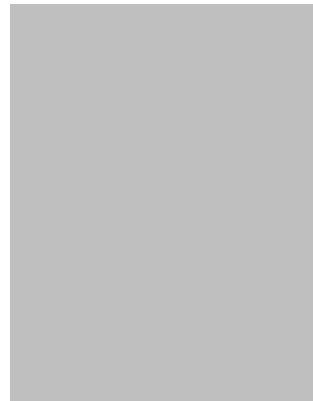
日本では50年代にアメリカン・ファッションがブームとなった。1947年には、女性らしいスタイル、丸みを帯びた肩と胸、細く絞ったウエストが特徴的であったクリスチャン・ディオールがパリでニュー・ルックを発表した。このニュー・ルックが、50年代のファッションの流れを決定し、華やかな服がその後も次々と創り出されて行くきっかけとなったと言われる。50年代初頭は、日本でも布地を多く使い裾の広がったスカート姿の女性が見られた。当時、これはアメリカ経由で入ってきたスタイルだったため、日本ではアメリカン・スタイルと言われていたようだ。その原型となるニュー・ルックは、世界的に流行したと記録されている。1954年からは、ヘップバーン・

カットと呼ばれるヘアスタイルが日本の若者の間で流行となった。映画スターの影響が強かったようだ。

1960年代にどのようなものが流行っていたかといえ
ば、まずVANを発端としたアイビー・ルックである。

(ずん胴型シルエット、ナチュラルショルダー、3ボタンというストレートな細長いラインが特徴。)

また、60年代には、ミニスカートが出現する。男社会において女性文化を主張するフェミニズム運動が起こったのだ。ミニスカートは女性的な身体のラインを強調するものであり、洋服の評価、女性の評価を変化させると考えられた。ミニスカート以外では、東京オリンピックが開催された1964年には、突発的に出てきたみゆき族が多く若者の間で流行した。ビートルズが来日した1966年には彼らが着ていたモッズファッションと呼ばれるファッションが大きな影響を与え、ブームとなったようである。



ヘップバーンカット 33-347
Audrey Hepburn C. 1952 IMDB

ヒッピーと呼ばれる人達が世間に広めたファッションアイテムであるジーンズは70年代ファッションの流行だそうだ。はじめは、シンプルなストレートジーンズが主流だったようだが、その後ベルボトムジーンズが登場し、ジーンズが最先端ファッションとして認識されていったそうだ。

80年代には、女性の社会進出が目立ち始めたと言われる。DCブランドのファッションが流行となった(DCとはデザイナーとキャラクターのブランドの略)。セクシーなボディコンスーツを着る女性も次々現れた。JJガールやボディコンスタイルなど、ブランド指向、肩の張ったシルエットの服が女性用戦闘服として反響を呼んだ。この時期にはカラス族が出始めたことにより、日常生活で黒いものを着る人(特に女性)が増えてきた。黒が魅力を発揮したようだ。

ミニスカートにルーズソックス、ガングロに茶髪といった奇抜な格好をする女子高生はコギャルと呼ばれたが、これは1990年代に見られたファッションである。コギャルが登場した頃はその奇抜なファッションや言葉使いが流行の先端として取り上げられたそうだ。

山内誠は「生活と環境」というセミナーで90年代について次のように述べている。「90年代にはファッション社会のルールを無視した『紺ブレ』が登場しました。それ

までの紺のブレザーはトラッドスタイルを象徴するもので、ボタンドウンのシャツ、チノクロスパンツ、レジメンタルなタイでコーディネートするのが普通でしたが、新しいコーディネートではジーンズとTシャツにあわせる单品コーディネートで自己流に着こなすようになりました。それまでの『おしゃれ』は、決められたルールを守ることでしたが、单品コーディネートでは自由に組み合わせられるので、経験の無い人、若い人からその新しい感性を取り入れることを重視し、自分をネガティブに見ない社会へと変わってきました。」

ギャングロは2000年ごろをピークに、日本の若い女性達の間で流行した。髪の毛を脱色して金髪かオレンジ色にし、肌を黒くするというスタイルのオルタナティブ・ファッションで、一部の人に非常に人気があった。それは、普段は白い肌が好きで日本の若い女性が「変だと思われるものも味わいたい」という考え方をしたのだろう。

2004年からギャル系女子の間で着ぐるみを着用する「キグルミン」というスタイルが流行した。彼女たちは、ピカチュウなどの着ぐるみを身にまとい、ビニールのショッピングバッグを手に渋谷センター街を徘徊していたのだが、これはアニメなどが及ぼした影響だろう。しかし、都心部から次第に廃れてゆき、一部の地区を除いて2004年にこの流行はなくなり、流行としては短命だった。また、日本独自のファッションのムーブメントであるロリータ・ファッションは、少女の可愛らしさ、小悪魔的な美しさを表現したスタイルである。欧米文化への憧れと想像力をエンジンに、懐古的でありながらも全く新しい日本独自の解釈を加えたティーンを中心としたストリート・ファッションであるが、最近では日本だけでなく、諸外国からも注目を集めている。今でも流行しているロリータ・ファッションは日本独特のファッションの中でも優秀なファッションであることは否定できない。

現在は日本のファッションが新たな注目を集めており、パリ、ニューヨーク、ミラノが発信するハイファッションばかりでなく、ストリート・ファッションやファースト・ファッションが強い影響力を持つなかで、ファッションの世界は大きな変化を迎えており、日本は非常にユニークなファッションがあることで海外でも知られている。そこで、一体欧米ファッションと日本のファッションはどこが違うのか見てみよう。

日本人は、繊細な美意識を持ち、見た目に対するこだわりも強く、何事にも美しさを意識する人種であるとされているが、これは確かに否定できない事実である。江戸時代は現代のファッション雑誌のようなものとして「遊女絵」や「浮世絵」などが

あった上に、ファッション・リーダーも存在したようである。また、ブランドに対するこだわりも当時からあり、着物から、米に至るまで日本人が「もの」に対してこだわっていたことが明らかにされている。これは立派なファッション社会が既にあった事を物語っている。ただし、四季の移り変わりや自然とのつながりも影響したのだろう、絶えず移り変わる季節はファッションの動きを呼んだはずだ。きもの色からも分かるように、日本人の自然に対する感受性の強さが服装の色使いに影響を及ぼしたと言える。ファッション・エディター、コンサルタントであるティファニー・ゴドイ (Tiffany Godoy) は、「服飾を通じたコミュニケーションの取り方もとても独特です。例えば、過去に小袖という着物があり、その柄には源氏物語などの文芸作品を暗示するモチーフが描かれることがありました。他の人はその柄を見て小袖を着る人の趣味や教養、そして感情を知ります。色や柄に繊細な意味があるのです」と述べている (2012年) が、同感である。17世紀に入ってから、日本では、自然観察が随所に語られる『枕草子』(996-) や世界初の長編恋愛小説『源氏物語』(1001-)、日本の美意識の礎とされる『新古今和歌集』(1205-) など、欧米の文脈には無い日本の視覚文化が古くから発達していたと考えられている。日本のファッションのもう一つの特徴は、バラエティの豊かさだと言われる。可愛い系、キレイ系、ギャル系、原宿(古着)系、姫系、ロリータ、ゴシックなど、多様である。スタイリッシュなもの、かっこいい系のシンプルな洋服が多いヨーロッパと比べると、日本はやはり「可愛らしさ」を重視したものが多いと見える。また、他の国では見られない日本人の重ね着スタイルも注目を集めている。個人的には、日本人の服を重ねて着る習慣は着物から来ているのではないのかと考えている。よくハイヒールを履き、メイクとヘアセットに時間をかけること、また色使いなどに、欧米とは異なる日本の女性の女らしくしたいという意識がよく出ている。

現代のおしゃれや流行には、時代が繰り返し、昔流行したものがまた違う雰囲気で見られる顔を出すのだが、これは、世界の服飾史と同じように、日本でも見られる。時代と共に流行は変わるのだが、それはほんとうに新しいものだけでなく、新しいと感ぜられる古いものからも作られるということだ。

4. おわりに

本研究では、日本の着物の歴史、衣服の変化について調べ、その考察をした。奈良時代、平安時代といった古い時代だけでなく、江戸時代から現代にかけての日本のファッションの変化も追ってみた。日本人の民俗衣装である着物は、現在にまで至る長

い歴史の中で、その時代を生きる人々の支持、流行に左右されながら、多様な好みを反映し、変容してきたことがよく分かる。奈良時代には大陸の「唐」の文化の影響が強かったが、平安時代に日本独自の様式をもった文化が生まれ、「国風文化」と呼ばれている。日本語で書き崩した「ひらがな」が使われるようになったのはその時代である。「衣装・衣服」は私的な生活領域においても公的な活動領域においても着ることによって、また着ている人を見ることによって広く普及していく文化だが、「国風の衣服」と「国風の文字」は共通の美意識、価値観によって結ばれているのだろう。その後の歴史においても「衣服の変化」はやはり「日本語の変化」と連動し続けているにちがいない。

明治時代になり、西洋文化とともに「洋服」が入ってくると、これが「キモノ」と共存するようになるが、第二次世界大戦以後は「洋服」が圧倒的に優位となる。しかし、「キモノ」は完全に忘れ去られるわけではなく、さまざまに形を変え共存しつづけようとしているようである。ファッションも言語のように意味を持つとすれば、それぞれのファッション、スタイルが語っていることも違うと言える。日本の歴史の流れの中で、ファッションに現れた変化と日本の文字、言葉、文法に現れた変化にはひじょうに興味を覚える。西洋の言葉の漢字翻訳、カタカナ表記による日本語化なども衣服の変化とシンクロしているはずだ。本研究ではこのようなことを考えさせられた。

残念ながら今回は日本の若者が日本の伝統的な衣服に対してどんな意識を持っているかについて調べることはできなかったのだが、機会があればこのようなものもぜひ明らかにしてみたい。

【参考文献】

- 石山彰編、1975、日英仏独対照語付 服飾辞典、ダヴィッド社
北村哲郎著、1978、『日本服飾史』、衣生活研究会
山下悦子、1980、『きもの歳時記』、平凡社
Cynthia Durcanin、2004、『What is fashion?』、Elle Magazine
八條忠基著、2005、『素晴らしい装束の世界』、誠文堂新光社
丸山伸彦、2007、『江戸のきものと衣生活』、小学館
増田美子、2010、『日本衣服史』、吉川弘文館
伊藤佐智子、2011、『Wonderful Japanese Classics きもの』、パイインターナショナル

田中里尚、中村仁、梅原宏治、工藤雅人、古賀令子、2011、『日本ファッションにおけるポップカルチャー』

西村秀一、2011、『近代(明治～昭和初期)の服飾——都市風俗の変化と着物文様の変遷』

山内誠、『生活と環境（ファッションとは?、日本人におけるファッションの意味や美意識、現象について）』、日本ファッション協会、流行色情報センター所長

尾形恵、2013、『*Using Kimono Cloth to Make of Western Clothes in Japan*』

石関亮、『日本のファッションの過去と現在』

<http://repre.org/repre/vol12/special/ishizeki.php>